知ろうとすることの大切さ

恵北中学校３年　今紺　愛里

１４時間のフライトを経て、初めて踏み入れた異国の地。外に出た瞬間感じた、嗅ぎなれない匂い。いつもと違う空気。日本と違う雰囲気。強い紫外線。たくさんの「初めて」が私の五感を刺激した。

私は、３月に市の国際交流派遣事業に参加しニュージーランドへ行った。平日はホストシスターと学校へ、休日はホストファミリーが毎週違うところへ連れて行ってくれた。応募した理由は、学校で学んだこと、英語教室で学んだことを試してみたいと思ったからだ。しかし、ニュージーランド到着から翌日。私と２人の留学生はそれぞれのホストファミリーと一緒に姉妹都市であるティマル市の市長さんのもとへ行き、モーニングティーをした。そして私は大きな壁にぶつかった。言葉が理解できない。うまく伝えることができない。他の人たちが楽しそうに話している輪の中に入ることができない。好きな教科は何？得意なことは何？そんな簡単な質問でさえ、頭がまわらずうまく返すことができない。明日から三週間、学校に通わなくてはいけないと思うと憂鬱な気分になった。誰とも打ち解けることなく、一人で過ごさなければいけないのではないかと不安と緊張でいっぱいになった。

そして始まった学校生活。固まっている私にクラスメイトたちがゆっくり話しかけてくれた。「どこから来たの？」「好きなスポーツは何？」「ニュージーランドのおいしいものは食べた？」思うように言葉の通じない私に質問し、私について知ろうとしてくれたのだ。また、授業終わりに、小さい時から大好きな「仔犬のワルツ」をピアノで弾いた。するとたくさんの人が拍手し、喜んでくれて「何という曲？」「この曲が好きなの？」「いつからピアノを始めたの？」と会話を広げようとしてくれた。私は、クラスメイトが知ろうとしてくれることにできるだけ詳しく返せるように努力した。

私は言葉や文化が違っていて上手く話せなかったとしても、知ろうとする気持ちが大切だということに気がついた。母国語のように言葉がスムーズにでなかったとしても、うまく伝えられなくても、完璧に理解できなくても、「知ろう」「伝えよう」とすれば、心は通じあえるということがわかった。

このように住んでいる国や文化が違ってもお互いに手を差し伸べあえば、一緒に遊んだり、尊重しあったりすることができる。日頃私たちは自分と似た個性、同じような価値観の人と一緒にいたがったり、自分と異なる個性や文化、価値観を持つ人をさけてしまいがちだ。「未知」であるから相手が何をどう思っているのか、どうしたいのかわからず、不安になったり、知らないから自分とは全く違うのだと思いこんでしまう。「差別」もきっとそういう怖さからうまれるのだろう。

私も初めは不安だった。しかし、現地の人たちは私にわかるように簡単な英文でゆっくり

話してくれるということを知っているから不安が減った。私と関係を築こうとしてくれていることがわかったから緊張が和らいだ。このように相手を少しでも「知ろう」とすることで、言葉や文化の壁をこえ、絆を結ぶことができる。人と人との間で起こったことを国同士に置き変えても同じことが言える。お互いの言語、文化、歴史が違っても相手の立場に立って理解しあえば争いは少しずつ減っていくはずだ。相手を受け入れ、お互いを知ろうと一歩、歩みよればきっと紛争や戦争が少しずつ減っていくだろう。今すぐゼロにするのは難しいが、各国同士が歩みより、手を差し伸べあい、全世界中の人が平和に暮らせればいいと思う。言葉が通じずとも、文化が違っても、お互いを尊重しあい、一緒に笑いあえた私たちのように。